大学院研究室だより

博士学位論文

学位授与年月日：　2013年９月15日

学位の種類：　博士（言語学）

氏　　名：　山方純子

論 文 題 目：「第二言語読解における語彙推測 ―語彙知識、母語背景、及び、テクストのトピックへの馴染み深さが及ぼす影響―」

要　　旨：

本研究の目的は、第二言語（L2）読解における語彙推測に、語彙知識、母語背景、テクストのトピックへの馴染み深さが及ぼす影響を検証することである。

L2日本語学習者55名（韓国語母語話者40名・中国語母語話者15名）を対象とし、比較検証のために日本語母語話者20名のデータも収集した。語彙知識は質と量の各側面に焦点を当てた語彙テスト２種の正答率、語彙推測能力は空欄補充テストの正答率をもって測定し、回想報告から語彙推測における知識源の使用数と成功率を抽出した。推測対象語を含むテクストは、馴染み深いトピックと馴染みの薄いトピックを用意し、その両方を調査対象者に提示した。

収集したデータを統計分析した結果、語彙知識、母語背景、テクストのトピックへの馴染み深さは各々、語彙推測の異なる側面に影響することが明らかにされた。語彙知識の質と量は各々語彙推測に異なる関与・貢献をし、特に語彙知識の深さが重要な役割を担うことが確認された。また、読み手の母語背景は語彙推測における知識源使用に影響を及ぼし、最終的な語彙推測に至る過程を決定づけること、馴染み深いトピックが語彙推測に有効に働くにはある程度の高さのL2習熟度を必要とする可能性があることが示唆された。そして、L2学習者の語彙推測はテクスト内情報に基づくボトムアップ処理が中心に進められるが、L2言語能力の向上と共に談話レベルや世界知識などを用いたトップダウン処理が増えていく様子から、母語背景に関わらず、複数レベルの言語処理が関わる複雑な言語活動であることが確認された。

平成25年度　修士論文題目と執筆者氏名

英語学専攻

修士論文

Issues on Acquiring Phrasal Verbs with Special Attention to their Characteristics and Relevance to English Proficiency …… 大澤　健太

On the Chronological and Sociological Perspectives of the Katakana Loanword in Translation －Some Quantitative and Qualitative Studies of 'The Catcher in Rye'－ …… 佐藤　耕太

修士研究報告

A Case study of Japanese College EFL Students Learning to Retell Narrative Stories through Guided Instruction …… 照屋　規恵

日本語学専攻

修士論文

「のだ」と「んだ」―談話管理理論の観点から― …… 安中　妙

日本語学習者における動機づけと聴解ストラテジー、聴解能力との関連について …… 大場　絵美

アスペクトとテクスト解釈 －限界性・クオリア構造・因果関係の果たす役割－ …… 櫻井　可菜

プレタスクにおける使用言語（L1・L2）がL2発話に与える影響 －中上級日本語学習者を対象に－ …… 尤　慧婷

修士研究報告

限定を表す取り立て助詞「だけ」「しか」「ばかり」 －実例の分析から－ …… 山下　陽介

大学院活動報告

■キックオフパーティー

2013年４月２日（火）に、有意義な一年になることを願い、本学４号館２階バルコーネにて「キックオフパーティー」と称した決起会を行いました。

■British Hillsセミナー

2013年６月８日（土）～９日（日）に、福島県岩瀬郡に位置するBritish Hills にて、セミナーを開催しました。博士前期課程7名、博士後期課程１名、研究生１名、合計９名が研究発表を行い、議論を展開しました。

■プロフェッショナル・ディベロップメント講演会

2013年７月22日（月）16:50 ～ 18:20に講師として長友 和彦氏（台湾・開南大学・応用日語系・教授）を迎え、『これからの言語教育は「多言語多文化同時学習支援」しかない !?』と題した講演が行われました。同講演では、現在求められているのは多言語多文化能力を備えた人材であり、その育成には日本語教育また言語教育一般における学習者が母語・母文化および既習言語を生かして多言語多文化を同時に学習することを教師が支援する、多言語多文化同時学習支援プログラムの必要性を提唱されました。

■第１回　ホームカミングデー

2013年８月31日（土）12：30 ～ 14：00に、本学７号館３階カフェテリアにて、ホームカミングデーを行いました。懇親会の前に、本学７号館ク

リスタルホールにおいてキャリア教育講演会を行い、修了生の細井洋実さんに『世界で戦う力を育む －グローバル時代に求められる力とは－』という題目で、小林ひとみさんに『日本語教師になるまでとなってから－大学院で得たものを120％活かして－』という題目で、それぞれお話しいただきました。懇親会には在学生・修了生など合わせて43名が集まり、和やかな雰囲気のなか、親睦を深めました。

■大学院キャリア教育講演会

2013年９月18日（水）16:50 ～ 18:20に講師として神永 暁氏（小学館コミュニケーション編集局国語辞典プロデューサー兼編集長）を迎え、『国語辞典の作り方』と題した講演会を行いました。同講演では、日本国語大辞典から幼児向けの辞典までさまざまな辞書の編集に携わった長年の経験から見た、実際の辞書編集の行程、時代の流れなどによって起こることばの形や意味の変化に対する配慮、編集現場の実態などについて具体的な例をまじえながらお話いただきました。

■東京サテライトキャンパスの開設とTESOLプログラム開始

言語科学研究科博士前期課程英語学専攻を改組し、2013年９月に東京（神田）サテライトキャンパスを開設し、TESOL（英語教授法）プログラムを開始しました。同プログラムは、主に、現職英語教諭を対象とした博士前期課程であり、効果的に英語指導法を学び、TESOL（英語教授法）でMA（修士学位）を得ることができます。最新理論に基づき、TESOL分野で第一級の講師陣による講義は全て英語で行い、週末や長期休業期間に集中的に講義を受け、２年半で英語教育の専門家を育成します。東京サテライトキャンパスは、神田外語学院７号館４階・５階に設置され、教室、図書室、院生ラウンジ、事務オフィスが置かれています。

入学者の募集は年２回（秋・春）行います。第一期生として社会人院生８

名がTESOLプログラムに入学し、10月５日（土）に初回講義が開始されました。

TESOLプログラムの活動はホームページにてご覧頂けます。

http://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/subject/grad/language/e_tesol/jp/

■浜風祭におけるポスター発表

2013年10月27日（日）12:00～16:00、本学３号館にて、博士前期課程の学生７名、博士後期課程１名、研究生１名が、研究内容について、ポスター発表を行いました。

安中　　妙	「のだ」と「んだ」―談話管理理論の観点から―
大澤　健太	Difficulties in Acquiring Phrasal Verbs
大場　絵美	日本語学習者における、動機づけとメタ認知、聴解能力との関連
櫻井　可菜	アスペクトとテクスト解釈－限界性の果たす役割－
ｻｸﾞﾜﾝｼｰ・ﾀﾝﾔｰﾗｯﾄ	タイ人日本語学習者の読解に対する不安－言語習熟度と読解力との関係－
佐藤　耕太	On the Style of Translation
山下　陽介	限定を表す取り立て助詞「だけ」「ばかり」「しか」の使用実態
尤　　慧婷	プレタスクにおける使用言語（L1・L2）がL2発話に与える影響－中上級日本語学習者を対象に－
和氣　圭子	説明文の言語的難易度が内容理解に与える影響－中上級日本語学習者を対象に－

■海外での日本語教育実習

2014年３月２日（日）～３月16日（日）の日程で、海外日本語教育インターンシップを行いました。国際交流基金の援助を受け、中国・天津にある南開大学外国語学院日本語学科へ、和氣圭子（博士後期課程）を派遣しました。当該日本語プログラムの担当教員の指導のもと、授業の見学・分析および授業実践を行いました。また、活動ジャーナルの提出及び、報告書の作成を行いました。

■大学院説明会

以下の日程で、博士前期課程及び博士後期課程の入試説明会を行いました。

第１回　2013年６月22日（土）14：00～15：30　学内・一般対象
第２回　2013年８月31日（土）14：00～15：30　学内・一般対象
第３回　2013年12月７日（土）14：00～15：30　学内・一般対象

平成25年度　開講科目・担当者

修士課程

―英語学専攻・日本語学専攻―

【共通科目群】

授業科目	担当教員	授業科目	担当教員
言語科学研究	大学院専任教員	言語科学演習A	長谷川　信子
言語科学演習B	堀場　裕紀江	言語科学演習C	（休講）
言語科学演習D	岩本　遠億	言語科学演習E	木川　行央
言語科学演習G	（休講）	言語科学演習H	遠藤　喜雄
統計処理法	Park Siwon	英語アカデミックライティング	遠藤　喜雄

授業科目	担当教員
修士研究	長谷川　信子、堀場　裕紀江、木川　行央、岩本　遠億、遠藤　喜雄、田中　真紀子、関屋　康

【言語研究科目群】

授業科目	担当教員	授業科目	担当教員
英日対照言語学（音声・音韻）	遠藤　喜雄	英日対照言語学（統語）	長谷川　信子
英日対照言語学（語彙・意味）	岩本　遠億	英語学研究（統語・語彙・意味）	遠藤　喜雄
日本語学研究（音声・音韻）	木川　行央	日本語学研究（統語・語彙・意味）	岩本　遠億
日本語学研究（方言・日本史）	木川　行央	日中対照言語研究	井上　優
日韓対照言語研究（院）	浜之上　幸	日西対照言語研究	（休講）
言語習得研究	（休講）	言語学特論	（休講）

【言語教育研究科目群】

授業科目	担当教員	授業科目	担当教員
応用言語学研究	堀場　裕紀江	第二言語習得研究（院）	関屋　康
評価法研究	堀場　裕紀江	早期英語教育研究	田中　真紀子
日本語教育学研究	堀場　裕紀江	日本語教育文法研究	岩本　遠億
日本語教育教材研究	堀場　裕紀江	言語教育学特論	（休講）
日本語指導技術Ⅰ	青木　ひろみ	日本語指導技術Ⅱ	青木　ひろみ

【コミュニケーション言語文化研究科目群】

授業科目	担当教員	授業科目	担当教員
コミュニケーション理論	（休講）	異文化コミュニケーション研究A	（休講）
異文化コミュニケーション研究B	（休講）	スピーチ・コミュニケーション研究	（休講）
スピーチ・コミュニケーション教授法	（休講）	日本研究	土田　宏成
言語文化研究	遠藤　喜雄	比較文化論	（休講）
比較文学研究	（休講）	談話分析研究	（休講）
社会言語学研究	San Kuen Fan		

博士後期課程

－言語科学専攻－

授業科目	担当教員	授業科目	担当教員
言語学特論演習	長谷川　信子	言語学特殊研究	（休講）
言語学特殊研究A	長谷川　信子	言語学特殊研究B	岩本　遠億
英語学特論演習	（休講）	英語学特殊研究	遠藤　喜雄
英語教育学特論演習	（休講）	英語教育学特殊研究	（休講）
言語教育学特論演習	堀場　裕紀江	言語教育学特殊研究	堀場　裕紀江
日本語学特論演習	（休講）	日本語学特殊研究	木川　行央

大学院　学術研究員活動報告

◆李　　榮　2009年３月本研究科博士課程満期退学

研究テーマ：　文の複雑さ、および読み手の統語知識と作動記憶が日本語説明文の理解に与える影響－韓国語母語話者と中国語母語話者の場合－

内　　容：　本研究では、テクスト要因と読み手要因の両方が、第二言語（L2）のテクスト理解にどう関わるかについて検証することを目的とした。韓国語と中国語を母語とする中上級のL2日本語学習者を対象とし、テクストの統語的複雑さ、読み手のL2統語知識と作動記憶の容量が、日本語説明文の理解に与える影響について調べた。

◆内山　　工　2010年３月本研究科修士課程修了

研究テーマ：　英語活動の単元構成における絵本の活用－児童の発達段階に応じた教材としての位置づけ－

内　　容：　英語の絵本を「読み聞かせ」の教材として利用するだけでなく、英語活動指導案作成時の単元構成をするとき、児童の興味や認知発達に応じた絵本の提示の仕方を模索した。同じ絵本を用いながら、繰り返しのリズムを好む低学年の授業展開にも、知的好奇心を刺激する必要のある高学年の授業展開にも有効な単元構成を工夫した。本研究は、東京都江戸川区立下小岩第二小学校の平成22，23，24年度の３年間にわたる校内研究（１年生～６年生）における英語活動指導案作成研修を通して行った。その成果を小学校英語教育学会（JES）沖縄大会にて口頭発表した。

◆大倉　直子　2010年３月本研究科博士号取得

研究テーマ：　１．統語論－授受動詞と文法　２．英語教育－体系的な言語知識（項構造）に基づく英語教育

内　　容：「～てくれる」「～てもらう」を加えた授受動詞・補助動詞構文の研究を行った。具体的には、これらの構文の統語構造を明らかにすると共に、語彙動詞が補助動詞として使われるようになるのを言語に広くみられる文法化ととらえ、他の文法化の現象と比較しながら、そのメカニズムの一部を明らかにした。

◆田所　直子　2010年３月本研究科修士課程修了
研究テーマ：日本語の語彙習得に関わる要因と学習活動
内　　容：第二言語としての日本語語彙習得に関わる様々な要因を探り、それらの要因と学習活動との関係を調べて効果的な学習法を提案した。今年度は、語彙タスクの中で特に、文脈中で語に接することの効果に注目し、文レベルのディクテーションを繰り返し行うことが語彙学習や日本語学習全般にどのような影響を与えるかについて、中級レベルの学習者を対象に長期的な観察を行っている。

◆富田　彩月　2013年３月本研究科修士課程修了
研究テーマ：日本語学習者の外来語の習得
内　　容：日本語学習者の外来語習得の実態を明らかにすることを目的とし、日本語学習者33名を対象に、２種類の語彙テスト（受容と産出）を実施した。調査の結果、産出テストの方が正答率が高かったほか、両語彙テストの外来語正答率に有意な正の相関関係が見られた。その成果をJ-SLA2013にてポスター発表した。

◆町田なほみ　2005－2006年本研究科研究生
研究テーマ：児童英語教育における文法導入のあり方について
内　　容：公立小学校英語活動用教材である『Hi, friends! 』に出現する機能語を抽出し、その用法から扱われている文法的要素を明らかにし、真のコミュニケーションには文法は不可欠であるとの観点から、英語活動における文法事項の導入方法を考察した。

その成果を2013年10月25日から28日に行われた全国語学教育学会にてポスター発表した。

◆松本　陽子　2010年３月本研究科修士課程終了
研究テーマ：　日本語のテクスト聴解における語彙タスクの影響－漢字提示とひらがな提示の比較から－
内　　容：　中国語母語話者を対象にテクスト聴解を行い、プレタスクとしての語彙学習の漢字使用による影響を検証した。その結果、漢字で提示するよりも、ひらがなで提示したほうが、内容理解を促進するという傾向が見られた。その成果を2013年10月13日、関西外国語大学での日本語教育学会にて口頭発表した。

◆山方　純子　2013年９月本研究科博士号取得
研究テーマ：　第二言語読解（L2）における語彙推測
内　　容：　L2読解における語彙推測に、語彙知識、母語背景、テクストのトピックへの馴染み深さが及ぼす影響を探った。その結果、それらは各々語彙推測の異なる側面に関与し、特に語彙知識の深さが重要なこと、母語背景は知識源使用に関わること、馴染み深いトピックの効果が表れるにはある程度高いL2習熟度が必要なことが確認された。

◆綿貫　啓子　2011年３月本研究科博士号取得
研究テーマ：　談話の文法
内　　容：　後置文について、これまで言語研究において異なる分野とされてきた「語用・情報構造」と「統語」、さらには「音声（韻律）」の間をつなぎ、従来の「文文法」の分析の枠を超えて、言語研究における部門間の関係を理論と記述の両面から考察した。

『神田外語大学大学院紀要言語科学研究』第21号

〈投稿規定〉

1．投稿資格

本大学院科目担当教員、修了生、在学生、及び、大学院紀要編集委員会が適格と認めた者。

2．採択について

投稿原稿には、審査がある。採否に関しては、大学院紀要編集委員会が決定する。採択にあたり修正を要求する場合がある。

3．提出について

原稿部数：3部

提出期限：2014年９月16日（火）正午

・執筆に関しては、次頁の「執筆要項」を参照のこと。
・和文論文には英文タイトルも添えて提出のこと（裏表紙に記載するため）。
・提出原稿は原則として返却しない。
・査読の結果、修正を求める場合、再提出の期限は別途通知する。
・採択決定後にデータファイルの提出を求める。

4．論文提出先・問い合わせ先

神田外語大学大学院共同研究室内　大学院紀要編集委員会
〒261-0014 千葉市美浜区若葉１－４－１
TEL/FAX：043-273-2971
E-mail：kiyo-g@kanda.kuis.ac.jp

〈執筆要項〉

1．テーマは言語研究、言語教育、コミュニケーション研究に関するものとする。
投稿する際、以下のどの部門か明記すること。

・研究論文　・書評　・研究ノート
・実践報告　・資料

2．原稿の書式は以下の通り。
使用言語：日本語もしくは英語
用紙設定：A4版横書きワープロ原稿、38字×30行
余白設定：上35mm、下左右30mm
上限枚数：研究論文・書評は18枚、研究ノート・実践報告は10枚
資料は原則18枚

【和文】

論文名：14pt（論文名の上を２行空ける）
執筆者名および所属：12pt
和文要旨：10pt（400字以内）
キーワード：10pt（５語以内）
本文：11pt
注：10pt（本文中の注は、右肩に通し番号「1, 2, 3, ･･･」を付け、論文末に記載。ワープロの脚注機能は使わない）、謝辞は通し番号の前とする。
参考文献：10pt
資料：指定なし

【英文】

以下を除き同上
論文名：14pt（重要語句の先頭を大文字にする)
英文要旨：10pt（200語以内）

3．原稿の区切りと見出し
原稿は章、節、項などに区切る。章の見出し番号は、通し番号とする。節の見出し番号は、「1.1」、「1.2」とし、行の左に書く。見出しの前はスペースを空ける。

4．図表は、それぞれ「図１」「図２」、「表１」「表２」とし、タイトルをつける。

5．表記は原則として、ローマ字はヘボン式、アルファベットは半角文字、数字は算用数字を使用する。

「紀要体裁（参考）」

・A4版横書きワープロ原稿
・書式設定　38字×30行
・余白　上35mm、下左右30mm

論文名：14pt（論文名の上を２行空ける）

執筆者名および所属：12pt

和文要旨：10pt（400字以内）
キーワード：10pt（5語以内）

１．本文（11pt）
1.1　○○
1.2　○○○
…（省略）…
３．○○

謝辞□←全角１文字スペースのあと書き出し～
～～～～～～

注（10pt・右肩に通し番号「1，2，3，・・・」付け記載）
１□←全角１文字分のスペース
２□

参考文献（10pt）
神田太郎（0000）
□□←２行に渡る時は、全角２文字分のインデント

資料